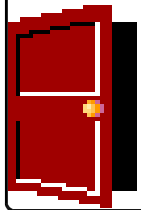


《読書活動の楽しさと大切さを伝えたくて》



読書活動への扉を開く！

桑村小学校 令和4年6月6日 文責 渡邊

印南敦史(いんなみあつし)著『読書する家族のつくりかた』(星海社2021年8月)を参考に、話を進めます。

印南氏は、著書の中で「まずは読書を高尚なものであると捉えることをやめましょう。」と言っています。私もここを大切にしたいです。本校で推進していく合い言葉は、「レッツ読書」ではなく、「エンジョイ！読書」です。子供も大人も読書を楽しむことをモットーに取り組みたいです。

印南氏は、読書を楽しみながら進めていくには、「読書をゲーム化する」ことを提案しています。

「読めなくてもOKだけど、読めるようになったらもっと楽しい。だから、そのための方法を一緒に考えてみない？」と考えることが大切。そこまではわかった。けれど、そのためには具体的に、何をどうすればいいんだろう？

そう感じ、具体的なことを知りたいと感じた方もいらっしゃるのではないのでしょうか？そのとおりで、いちばん重要な点はそこです。多くの方は「どうすべきか」についての具体策が見つからないからこそ困っているのしょうから。

そして僕が「読書をゲーム化する」ことの重要性を強調したいのも、そこに突破口があると強く感じるから。というわけで、ここではそのことについて説明したいと思います。

まず最初にお伝えしたいのは、読書は娯楽であるべきだということ。もちろん、専門書と向き合わなければならない研究者とか、仕事のために(読みたくもない)本を読まなければならないビジネスパーソンなどの場合は、いささか事情が異なるかもしれません。

しかし、少なくとも子供にとっては、読書はなんらかの意味で楽しみである必要があるので。ただし、ここでいう楽しみとは、娯楽小説のみを指すものではありません。ビジネス書であろうが哲学書であろうが、読む側がそこに何らかの楽しさや充実感を得ることができる、そのことこそが重要だという意味です。なぜならそうした感情が、結果的には「読みたい」「読もう」というフックになっていくからです。

ですから、まずは読書を高尚なものであると捉えることをやめましょう。繰り返しますが、「たかが読書」なのです。しかも、それは「自分のための読書」なのです。苦しい修行ではないのです。むしろ楽しみなのです。

読書をゲーム化したら、子供はきっと楽しめることでしょうね。子供たちはゲームが大好きですから。では、具体的な方法はどういうと裏面で紹介するように函南町立図書館を家族で利用するアイデアです。



【町の図書館の出張貸し出し①】 【町の図書館の出張貸し出し②】

◆「借りてきた本公開タイム」

読書週間を定着させるためのもうひとつの方法に、図書館の利用があります。もし、「図書館なんか行かないから」というのであれば、今すぐそんな思いを捨て去ってください。「昔は行ったけどね」とか「行ってないな」というように、あたかも自分に関係ないようなことを口にするのはなしです。使えるものは、使ったほうがいいに決まっているからです。

しかも、家族で利用することには別のメリットもあります。みんなで図書館に行く道すがらには、何か話をするようになるでしょう。「おなかすいたよね」とか、どうでもいい話かもしれませんが、しかし、少なくともそこに数分、もしくは数十分の会話の時間が生まれるわけです。それは話の内容に関わらず、大切なことだと思います。

◆「借りてきた本公開ゲーム」の実施方法

- ・家族で図書館へ行き、(30分後など) 集合時刻を決めてから散らばる。
- ・各人がそれぞれ、興味のある本を借りる。
- ・集合してからも、選んだ本の話はしないでおく。
- ・帰宅後、みんなで借りてきた本を公開し合い、選んだ理由を家族に明かす。

函南町の図書館「知恵の和館」は、とても図書が充実しています。子供だけでなく大人も大いに楽しむことができます。子供たちにたくさんの図書の中から、是非読んでみたいという本を選択するのはとてもよい経験になるのではないのでしょうか。また、それをもとに図書について話をするのもすてきなことですね。まずはご家族で図書館の利用カードを作成しましょう。このカードは、本校の出張貸し出しの時、学校で利用できます。

さて、皆様にはお願いです。ご家族で函南町立図書館に行かれ、「借りてきた本公開ゲーム」を実践された方は、そのときの様子を紹介していただけないでしょうか。

「こういう点がよかった」とあるとか、「こういう点が難しかった」ということをお知らせいただけたら、親子で取り組むよりよい方法が見つかることと思います。

ご感想、ご意見をお待ちしています。

----- 切り取り線 -----

「読書活動の扉を開く」(6月6日号)を読んでの感想
ご家族で「借りてきた本公開ゲーム」を実施しての感想
()年()